



楽しい晩酌でうつらうつらして、寢床に入るとボタンキューで高いびき。

「オイオイ！そんな所で寝ていると邪魔だ、早く起きろ！」と言われて目を開けると、黄鬼さんが立っている。なんと三途の川岸であった。

「お前さんはなぜそんな所にいるのだ！どうしてその川が渡れたのかね」「はい、うつらうつらして夢心地で歩いていますと、目の前にカードが落ちていたので拾ったとたん、ここに来てしまったのです」

「よく川を渡れたな」「はい、カードに六文銭が印刷してありました」。

とたんに鬼が笑い出し「なるほど分かった。たぶん新しい二十世紀仏がお生まれになって、黄泉の国も時代に合った改革をするのだと意気込んでおられるそうで、地獄極楽と言われていた昔と今では随分変わりつつあることをお前に見せて、下界に帰ってそのことを伝えてもらいたいのであろうな」

「それにしても黄鬼さんとは珍しいですね？」「ア俺か、赤鬼の美人にチョッキイを出して叱られ、黄色にされたのだ」「なるほど危険鬼ですか！」「馬鹿！」

黄鬼さんに導かれて大門の前まで来ると「お前は青門と赤門どちらを選ぶかね？」と聞かれて、暫く考え「青門から入ります」と答えた。そうかと鬼がニヤツとして「さすがに選ばれただけのことはある。死者が来ると、門といえば東大の赤門を思うのかすぐ欲を出し、一回は入りたいと足を踏み入れたとたに転落して地獄行だよ、ハッハッハ」と大笑い。このことに私も冷や汗が出た。



しばらく行くと、黄泉の国では珍しい恵比寿の神がおられたので吃驚、どうしたものかと戸惑っていると「お前が二十世紀仏に選ばれた特待人か？」「は、はい。どうしてまた恵比寿様がこんなところに？」「いや実はな、天には神と仏と一緒に居っての、人間に関わりがあるためお互いに協力し合っているのだ。よって、今回特に協力を頼まれたのじゃ」

「へ～神が仏に協力するのですか？」「何を言っとる、死にかけた人間を蘇らすのは神の力ではないか！」「は、確かに？」「とにかく下界は騒々しい。紛争が止まず、天変地異で被害も多過ぎる。今また疫病の感染で死者が増えているそうで、黄泉の国でも手が足りないらしく新しい改革に、私に協力してほしいと指名があったのだ」

「しかしどうしてお前とこの恵比寿の取り合わせなのかな？ところで生年月日と歳は？」「はい、昭和2年1月10日の93歳です」「あれ？それでは昭和初めの恵比寿本宮祭りの日に生まれたのか！いやはやこれは目出鯛の、二十世紀仏も粋な計らいをしてくれたものだ、まるでわしと末孫との初顔合わせかい！」



「余談はさておき中を案内しようかね」「随分沢山の死者が働いていますね？」「黄泉の国に来たからと言ってもすぐ成仏しないのだ、お釈迦様の招きを受け後光を浴びて初めて成仏して消えるのだ、それまで死者が亡者にならないように諸仏巡拝等の修行をするのだよ」「へ～、死んでもまだ修行ですか！」

「だいたい人間は、生物の中でも傲慢すぎる。天が与えた寿命をどう考えているのかね？そもそも寿命はすべての生物に与えられ、植物はその年が近づくと自然に枯れ、また天変地変や動物の暴力によって朽ちる。ところが動物は生きるため種族のために争い、傷つけ殺し合って自滅している。特に人間（大人）は更なる高みを望み文明に貢献するとかで、慾を出し体を痛め早死しているのだ」「そうすると人間が一番寿命を粗末にしているのですか？」「そうとも言えるな。天が男女それぞれに平均寿命を与えているのに、事情はともかく分相応に生きることや、体の大事を考えずに死に急いでいるようで嘆かわしいよ」



「ところで諸仏巡拝の修業とはどういうことをするのですか？」「先ず修行は水汲みと接待から始まるのだ、あのように巡拝等をしている死者のために天の川の水を汲んでくるのだ」「え？水ですか」「天には水がないのでな、死者でも働くと喉が乾くからその水だ」「天には雨は降らないのですか？」「そうだ天は無窮で空気も雲もないので雨も降らない。死者は水さえあれば働けるのだ、足がなくともな？オタマジャクシのようなものだね」「へ～変なたとえようですね」

「オリンピックマラソンの途中で飲み物を接待しているのと同じことよ、その水汲みを何年か済ませるとあのように接待係、それを何年かしてやっと順番が来て巡拝していると、お釈迦様からお呼びがかかるのだ」「それではその修業は何年かかるのですか？」「それは平均寿命から死んだ年数をひいた年数だ、つまり早く死ねばその分修行の期間が長いということだよ」「ああの人、知っていますよ。立派で有名な方が接待係ですか？」「そうだ定年早々で死ねばそうなるね。立身出世しても無理が重なって体を壊せばあの姿になるのだ」「可哀そうに」「そうだ自殺した若い死者な

どは水汲みを長年しているよ」「へエ～、ここでは生前の地位や名誉, 富豪も関係ないのですか?」「黄泉の国に来れば全てが平等だよ、そんなもの関係なし」
「では死に際に戒名を付けてもらいますがその位階は?」「それも関係なし、寺院に多額の寄付をして貢献したことで授与されるが、それによってお釈迦様に特別優遇されることはないのだ。とにかく黄泉の国では死者全てが平等に扱われる。だからお前さんは下界に帰えれば、寿命をよく考えて、とにかく平均寿命までは生きるために、体を大事にするよう啓蒙することだ。それが今回お前に見学させて与えられた天命だよ」「はい、よくわかりました」「話が長くなって何時の間にかお日様が顔を出してきた、説話はこれで終わりにしよう。今宵はお前さんに会えて楽しかったよ。100 歳になってここに来たら大歓迎するよ、お釈迦様にも直ぐ合わせてやる。体を大事にきなさいよ。さらばじゃ!」 恵比須様の姿が急に消えてしまった。



「まあ～にやにやして、爺ちゃん朝だよ起きなさい!」「え、もうこんな時間かい。あれ! この鯛焼き土産に貰ったのかな?」「え、何言ってるの? 私が買ってきたのよ!」???「母さん大変だ～! 爺ちゃんほんとにボケたよ～」 了